

2002年5月24日(金)

情報提供: Japan Medicine(株式会社じほう)

## 「ZD1839」肺がん患者の生存期間を延長

ASCOで近大・福岡教授グループが報告

近畿大医学部の福岡正博教授(腫瘍内科)らのグループは19日、米国オーランドの米国臨床腫瘍学会(ASCO)で、新しい分子標的抗がん剤「ZD1839」の国際共同治験「IDEAL1」でのフェーズ2結果を発表した。

IDEAL1は、プラチナ製剤ベースの療法などの治療を既に受けた進行非小細胞肺がん患者を対象に、1日投与量250mg、1日投与量500mgの用量別に有用性を比較した治験。その結果、進行非小細胞肺がん患者に同剤を投与した場合の生存期間(中央値)は、7.6か月(250mg投与群)、7.9か月(500mg投与群)だった。

QOLの観点から評価する症状改善は、250mg投与群の40.3%、500mg投与群の37.0%の患者に認められた。奏効率(著効+有効)は、250mg投与群18.4%、500mg投与群19.0%で、病勢コントロール率(著効+有効+病勢安定)はそれぞれ54.4%、51.4%だった。

奏効率を国別に検討すると、日本人は両投与量ともに27.5%で、日本人以外の9.6%(250mg投与群)、11.1%(500mg投与群)よりもかなり高い。同剤の安全性では、とくに500mg投与群でグレード3~4の副作用が認められるが、おおむね軽度から中等度のもので、今回の結果は同剤の有用性を示すものとなっている。

福岡教授は、今回結果について

- (1) 通常4~5か月の生存期間(中央値)が約8か月に延長された
- (2) 40%近い人に症状の改善が認められた
- (3) 副作用が比較的少ない などをポイントとしてあげた。